

第21回毎日国際交流賞



ごあいさつ

毎日国際交流賞は、第21回を迎えました。

この賞は草の根の国際交流や協力活動を促進し、市民の国際理解を深めるのを目的に、1989年に創設されました。それから20年以上の時を経て、現在の世界情勢は混迷を深めています。米国発の金融危機は世界に広がり、「100年に一度」の経済危機が各国で人々を苦しめています。各地のテロや戦乱も収束する気配を見せません。

一方で、09年末にハイチで起きた大地震では、日本を含む多くの国からボランティアが駆けつけ、最貧国に起きた大災害で厳しい状況にある人々を助けました。深刻な混乱の中だからこそ、お互いの顔が見えるような市民レベルの国際交流や国際協力は、ますます意義と重要性を増していると言えます。

さて、第21回毎日国際交流賞には国内外から自薦・他薦を合わせて団体102、個人28の計130件の、過去最多の応募がありました。20回を超えて、賞の知名度が上がってきたことなどが背景にあるとみられます。事務局による1次選考で団体6件、個人4件の計10件の候補に絞り、選考委員会で慎重に審議した結果、団体として特定非営利活動法人「難民支援協会」（東京都新宿区）、個人として「教育と環境の『夾』企画室」代表の片桐和子さん、昭吾さん夫妻（新潟市）が受賞されました。

難民支援協会は1999年から活動しています。主に日本にやってきた難民に対する法的支援や生活支援、そして政策提言を行う団体です。日本は欧米諸国に比べて難民受け入れの態勢が十分に整っていないという批判がある中、難民支援協会は、難民申請者に対する支援に精力的に取り組んできました。日本国内の約30カ国、年間約300人の難民認定申請者の相談に乗る一方、日本政府に対して難民認定制度についての政策提言や市民への啓発活動を行ってきました。

片桐和子さん・昭吾さんはインドのストリートチルドレン支援に退職後の生活を捧げている元教師と元国鉄マンの夫婦です。現地のNGOと協力してストリートチルドレンの自立支援施設「子どもの憩いの村」を建設する事業のため、昭吾さんは警備会社に再就職、和子さんはチャリティーバザーやコンサート開催に奔走しています。現地で井戸を掘り、宿泊所、職業訓練所などを順次建設しました。現在は60人の子どもたちが身を寄せています。4月からは学校建設プロジェクトをスタートさせています。

それぞれ「内なる国際化」とも言えるユニークな活動」「定年退職後の人生を国際ボランティアに捧げた一つのモデルケース」として注目されました。

この小冊子は第21回毎日国際交流賞の表彰式、受賞記念講演会（09年10月10日）での受賞者の活動報告などをまとめたものです。ぜひご一読ください。

2010年3月

毎日新聞社

第21回 每日国際交流賞表彰式

2009年10月11日 朝刊社会面

選考経過報告

選考委員長・元駐フィリピン大使 湯下 博之さん

■毎日国際交流賞表彰式

市民レベルの国際交流や協力活動を顕彰する「第21回毎日国際交流賞」(毎日新聞社主催、外務省後援、クボタ協賛)の表彰式と受賞記念講演会が10日、大阪市北区の毎日新聞大阪本社オーバルホールであった。団体受賞の認定NPO「難民支援協会」(東京都新宿区、中村義幸代表理事)と、個人受賞の「教育と環境の『爽』企画室」代表の片桐和子さん(72)と昭吾さん(73)夫



妻(新潟市西区)に、伊藤芳明・毎日新聞大阪本社代表から賞状が贈られた=写真。記念講演で中村代表理事は、日本での難民認定申請者が増加した背景を踏まえて同協会が設立10周年を迎えた現状を紹介。今後、難民の自立支援のための施策の充実が必要と訴えた。片桐さん夫妻は、定年後に私財を投じてインドで路上生活する子どもたちが暮らすための施設の建設に取り組んでいる状況を説明した。(詳報は今月29日朝刊に掲載予定)



北岡正好・株式会社クボタ常務執行役員(左)から賞金目録を受け取る難民支援協会の中村義幸代表理事(写真上)と、教育と環境の『爽』企画室の片桐和子さん・昭吾さん夫妻(写真下)

選考委員会を代表して、選考の経過をご報告いたします。

先ほどからお話をありましたように、毎日国際交流賞は、今年で第21回となり、国内外から自薦・他薦を合わせて団体102、個人28の計130件の応募がございました。これは過去最大の数字になります。20回を超えて、賞の知名度が上がってきたことなどが背景にあるとみられます。改めて関係者の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

選考は例年通り、まず事務局が第1次選考をし、団体6件、個人4件の計10件の候補に絞り、その10件について選考委員会で慎重に審議をいたしました。いずれも素晴らしい業績を残しておられる団体、個人ばかりで、審議にはかなりの時間を費やしました。その結果、団体は特定非営利活動法人「難民支援協会」、個人は「教育と環境の『爽』企画室」代表の片桐和子さん、昭吾さん夫妻に決定いたしました。

決定に至る受賞者それぞれのご活動の要点を紹介させていただきます。

…中略…

片桐和子さん、昭吾さんは、インドのストリートチルドレン支援に退職後の生活を捧げている新潟市の元教員と元国鉄マンの72歳と73歳のご夫妻です。インドへのスタディーツアーで、ストリートチルドレンの様子を見たのが行動のきっかけになりました。現地のNGOと協力してストリートチルドレンの自立支援施設「子どもの憩いの村」を建設する事業に乗り出しましたが、資金的な困難に直面します。昭吾さんは警備会社に再就職、和子さんはチャリティーバザーやコンサート開催に奔走しています。現地で井戸を掘り、宿泊所、職業訓練所、診療所、グラウンド、図書館を順次建設しました。現在は60人の子どもたちが身を寄せています。職業訓練を受け、すでに自立した元ストリートチルドレンも多く、4月からは学校建設プロジェクトをスタートさせています。

片桐さん夫妻は定年退職後の人生を国際ボランティアに投じて、地に足のついた活動でインドのストリートチルドレンを支援しています。その活動で周囲に感動を与え、多くの人を子どもたちの支援のために動かしています。夫妻のこうした取り組みは、団塊の世代の大量退職の時代に一つのモデルケースとしてとらえられるのではないか、と高い評価を得ました。

今回の受賞の方々についてのご説明は以上のとおりですが、現在、日本も世界も大きく変わろうとしており、日本についてみれば、「第三の開国」が必要ということも言われて、アジアをはじめとする世界の人々との共生が必要な時代になっております。そして、それを成功させるためには、政府の政策もさることながら、まさに、草の根レベルの国際的な交流や支援・協力活動、更には友好親善活動が重要です。

毎日国際交流賞がそのような活動を支援し、促進することにお役に立つことを願い、また、ここにお集まりの皆様をはじめとする大勢の皆様が、そのような活動へのご关心をますます高めてくださいますようお願ひいたしますと、ご報告の結びといたします。

思い続ければ夢はかなう



教育と環境の「爽」企画室
片桐和子さん（代表）
昭吾さん（運営委員）

片桐和子
1937年生まれ。1957年から新潟県内の小学校教諭として勤務。退職した97年に、教育と環境の「爽」企画室を設立。03年から、インドにストリートチルドレン自立支援センター「子どもの憩いの村」を建設・運営。09年から「憩いの村」に認可小学校建設プロジェクトをスタート。

片桐昭吾
1936年生まれ。国鉄、東北電力に勤務。現在は、教育と環境の「爽」企画室の活動にかかわりながら、新潟第二総合警備保障で学校警備に従事している。

「やればできる」を信念に！

（片桐昭吾さん）

今回、毎日国際交流賞という身に余る大賞をいただきまして、夫婦ともども非常に感動しています。去年までそううたるメンバーが受賞されている中で、私どものような市井の片隅でこつこつと活動している者に光をあてていただき、本当にありがたく感謝の気持ちでいっぱいです。この受賞を機会にさらなる力を得て、団塊世代の代表として今後も活動にまい進していきたいと存じております。

妻が代表で、夫の方が後に書かれているというのちちょっと奇異に感じたかもしれません、全くそんなことはなく、15年前から私は妻を支えており、世帯主も妻です。選挙や申請書などを届けに行くたびに、世帯主が間違っているのではないかというように私の顔を見るのですが、選挙に行くと妻が先に投票しないと事務が滞るから妻が先に、私が後によるとやってきました。最近はやっと奇異の目で見られることもなくなってきました。男女共同参画社会です。私は堂々と妻を支えて生きていきたいと思っています。

私は、新潟市のちょっと北にある新発田市の生まれで、母は私を産むとすぐに高熱を出

して亡くなりました。父もそのショックで相次いで亡くなりました。インドであればストリートチルドレンになるところでした。群馬県境の山の中の寒村の、片桐という家にもらわれていきました。そこで小学校、中学校と上がったのですが、もらわれっ子ということにいじめに遭いました。いじめに遭ったら今どきはへなへなとなるのかもしれません、私はなにくそ負けてなるものかと、スポーツに力を入れました。夜、ほかの子たちが帰った後、暗いグラウンドを一生懸命走り、百、二百、走り幅跳び、走り高跳び、砲丸投げと、五つの種目で、永久に破られないほどの校内記録を作ったら、いじめはピタッととなりました。そんなことで、努力すればいじめはなくなる、と思っています。また当然大学なんて夢のまた夢だったのですが、図書館にこもって通信教育で卒業しました。年間の授業料9000円ですから、4年間で3万6千円で大学を卒業することができました。やればできる、という信念でやっております。

一方、妻の和子は神奈川県の生まれですが、やはり私と同じく新潟県の魚沼市で育ちました。これがさらに悲惨な生活で、父親が傷痍軍人で、終戦後、引き揚げてきて、実家の片

隅に小屋を作って生活していました。当時、軍人なんていっても恩給制度もなかったので、収入はゼロ、自給自足生活で暮らしてきました。かわいい弟2人と妹1人の3人を、一応病死とはなっていますが、実際は栄養失調で終戦後に相次いで亡くしています。そんな極貧の生活でしたが、負けないで奨学金を得ながら、とうとう大学の前期まで修了して、小学校の教師になって頑張っていました。私は8歳で彼女と会って、それから43年間思い続け、アタックしたのですが、なかなか結婚までは至りませんでした。絶余曲折の末、51歳で結婚して、まだ22年間しかたっていない、新婚ホヤホヤです。婚活中の人の一つのモデルになるかと思います（笑）。

ストリートチルドレンとの出会い

さて、そんな背景で生まれた私たち夫婦は、98年12月末、今まで働いてきた一つのご褒美に、インドの実態を見てこようと、スタディーツアーに参加しました。ベンガル湾沿いのオリッサ州の、とある駅に真夜中に降り立ちました。そして衝撃的なストリートチルドレンとの出会いがありました。出口の方に向かって、屋根のないホームを二人で歩いていた時に、何



（図1）

か軟らかいものにぶつかった気がしたんです。電気もないで、月明かりに透かして見ると、15、16個の塊がありました。それがストリートチルドレンでした。つまづいた私の目に飛び込んできた、暗い中の恨めしそうな目玉が今でも私の脳裏から離れません。その後、ビシャカバトナム市（図1）に見学に行きましたが、道端のゴミを拾ったり、物乞いをしたり、



（写真1）

明日をも知れぬ命でドラッグに手を染めて、その日一日を生きてる子もいました。残飯を食べている子もいました（写真1）。

そういう実態を見て、日本で生まれた子どもたちは児童養護施設に収容されて、高校までめんどうをみてもらい、こづかいももらえます。片やインドに生まれたことで、無限の可能性がある自分の将来の入り口さえ閉ざされる現実。こんなことが許されていいのかという疑問がわきました。ビシャカバトナムには300人ぐらいのストリートチルドレンがいます。08年の統計ですが、インド全体では0歳から17歳までの孤児の数が2570万人。これは今年（09年）の敬老の日に65歳以上の日本人は2898万人で、ほぼこれに匹敵する数字です。こういう現実を見てしまった以上、私は人間としてこの子たちを救う使命が当然あると思います。よく、なぜあなたはインドを支援するのか、と言われますが、答えはそ

れしかありません。私たちは通勤あと何分で会社につかなければいけないという忙しいとき、もし川で流されている子どもがいたら、その子を見捨てて会社へ行けますか？ 当然救おうと飛び込むでしょう。それと同じ気持ちです。

働く=はた（傍）の人を楽にさせる

私たちは40年以上も戦後日本の復興のために、私は国鉄で30年、その後東北電力で13年、企

業戦士として休みなく働いてきました。妻は子どものために40年間、教育界で働いてきました。それぞれ土・日なく働きづめでした。「働く」とは一体どういう意味があるのでしょうか？

はた（傍）の人を楽にさせる、というのが働く意味なんです。なぜ私がそういうかというと、私たちの時代は15歳になって中学を卒業すると、集団就職列車に乗って、男は上野で個人商店主に引き取られ、女性は名古屋、岐阜の紡績工場に集団就職しました。上野駅に着くと、のぼり旗を持った雇い主たちが出迎えるわけですが、ある人が「はたの人を楽にさせるために頑張ってください」と声をかけました。その店主の言葉を忘れることができません。はたの人、身近な人となると、まずは15歳まで育てくれた両親、そして結婚すれば女房、その後は子どもたちを樂にするために働くわけです。私たちは今インドのストリートチルドレンを楽にさせるために働いています。私は警備会社で働いていて、昨日も徹夜勤務で、今日に間に合うように新潟から飛行機でやってきました。

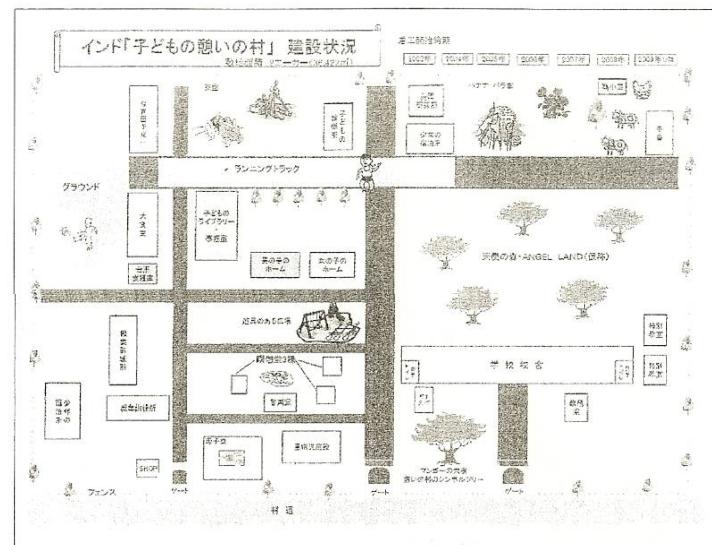
インドの広大な原野を確保して、切り開いて「子どもの憩いの村」、いわゆる自立支援センター、略称、片桐センターというのを作りました。安心して眠れる場所=ホームを作り、食べ物を腹いっぱい食べさせて、そしてお母さんがいないので、お母さん役の現地の人に来てもらい、愛を注いでいただく。落ち着い

たところで識字教育をして、職業訓練をしてふるさとへ自立させて送り出す。こういう遠大な夢に向かってスタートしたのが03年でした。村には大きな木があります。村のシンボルツリーのマンゴーの木です。1本で何千個となります。大切な食料、おやつになります。

逆転の発想で、常にプラス思考で考える

夫婦2人で無謀とも言える計画をスタートしたのですが、私財がたった1年で底をつきました。そこで新潟県内の企業の社長さんなら、1、2人理解してくれるのではないかと、100社ぐらいの社長さんに手紙を書いて、少しでもご寄付いただけたらありがたいと訴えました。残念ながら答えは、「あなたのところに寄付したら、ほかにも寄付をしないといけない。そんなお金はない」「企業にとってインドを支援してメリットはなんですか？」「不況でお金がありません」。社長さんに会わせてもららず、受付の人には断られたこともあります。みんなこの3点の同じ理由でした。そこで友人、知人に訴えるしかないと、頭を下げる、「なぜインドなのか」と逃げるような目で拒否されました。そんな中、マスコミを通じて訴えたら、大阪府の14人の方から激励の手紙とお金をいただきました。本当にその時は涙、涙でした。その14人の方の貴いお金を基に再起を果たして今日までやってきました。とうとう「子どもの憩いの村」を完成させることができました。

2人でやるしかない。こういう思いが実りました。なぜできたのか。そんなことできるわけないだろう、と言わないで、逆転の発想で、できないと言わずに「できる！」とプラス思考で常に考える。逆転の発想でいえば、年寄りは若い。私は73歳ですから、逆にすれば「37歳」の若さです。富士山のような高い山で拒否されたら、その山を逆さにして、低い山な



(図2)

ら登れる。希望があると思う。我が家では10時になると妻がコーヒーを出して、二人で語り合います。365日、「27歳」の彼女から夢を聞かされれば、いくら頑固な私でもその気になります。支えてやらなきゃ、支えてよかったという気になります。では「27歳」の夢のある話を聞いてください。

* * *

悲惨な子どもたちに、ぬくもりを (片桐和子さん)

夫が熱弁を奮い、私の時間が減ってしまい、またので、走り走り話をさせていただきます。

支援をするにあたって一番大切なのは現地のパートナーです。パートナーに巡り合うことで私たちの事業が進みました。私の大好きなパートナーは、NGO「ニューホープ」の代表、ローズさんという男性です。私にとっては2番目の最愛の人といえるでしょうか。一

番目はもちろん後ろに控えている夫ですが(笑)。この方と一緒に取り組んで、大きな事業をやり遂げることができました。メールで頻繁にやりとりしている訳ですが、英語もろくにできない私が、パソコンも初めて勉強しました。「65の手習い」です。スキャンを使って写真を送ったり、パワーポイントもできるようになるんですよ。

「憩いの村」は、インドのアンドラプラデシュ州ビシャカバトナム市の郊外にあります。私が最初に行った時はマレーシアのクアラランプールから、チェンナイ、ハイデラバードを通り、大変長い距離、長い時間をかけて出会った子どもたちです。本当に真夜中に出会った時はびっくりしました。こんなことがこの世にあっていいのだろうか。私はフィリピン、タイ、ネパールなどでも、たくさんのかわいそうな子どもたちに出会うことはあったのですが、真夜中に真っ暗いホームで寝ている子どもたちと出会った時の驚きは、終生忘れることができません。

施設の自立運営を目指した仕組み作り

憩いの村の敷地は5エーカーで、学校を建設することになり、4エーカー足して約9エーカー=3万6000平方メートル(図2)。甲子園



(写真2)

球場とほほ同じでしょうか。子どもたちのいろいろな施設を作っていくわけです。初めはホーム=寝るところを造りました。私は引き揚げて来た時、掘っ立て小屋に住んでいましたので、やはり雨漏りのない部屋を作ってあげたいと思いました。片桐チルドレンズホームボーディング（写真2）。ここだけは私たちの名前をつけさせてもらいました。330万円をかけて、ホームと台所、井戸を作りました。私たちの最初の出発点です。まず休むところ、寝るところ、きれいな井戸水。地中深く掘り下げてポンプでくみ出す、少しづいたくな井戸を作りました。中では寝るだけではなくて、最初はなにもない床に腰を下ろし、学んでいました。子どもたちは小さい時から、不安全危険と背中合わせの中に住んでいたので、みんな身を寄せ合って寝るんです。一人ひとり別々にしていても、いつの間にか固まって寝てしまします。次に、少年の宿泊所を作りました。職業訓練所に遠くから通って来る子のためのものです。

地域とのかかわり合いを大切に

施設の中にはかなり大勢のスタッフが働いてくれています。街で非常に不幸な暮らしかしていた方々、母子家庭の人、身寄りのない人、

女性としてはつらい生活をしていた人たち。ボランティアで食事の世話をしてくれる、地域の村の女性たちもいます（写真3）。ローズ氏が、大食堂は子どもたちの一番大切なところだから、自分の古里のような草ぶきの屋根



(写真3)

にしたいと、ヤシの葉の屋根にしました。200人規模の広さです。

職業訓練所は最初1棟でしたが、見ず知らずの方が「自分が病気になったので、海外旅行に行こうと思っていたお金ですが、あなたの心を伝えてください」と多額に寄付してくださいり、2棟にできました。ミシン、自転車の修理やサンダル製造などを学びます。インドは自転車社会なので、自転車修理は非常に人気です。コンピューターも年長者の人気メニューです。まだ、はだじで歩いている子どもたちにとってサンダルは初めて手にするのですが、自分たちで履くものを作るわけです。ブルーの制服も自分たちが習いながら作ります。瞑想（めいそう）センターは2年目に造りました。現地からの強い要望で、悲惨な暮らしで心がすさんでいる子どもたちを休めるには、癒やしの場が必要だということでできた施設です。子どもたちはここで朝夕欠かさず祈りを捧げます。宗教はヒンズー、イスラム、キリスト教などいろいろあるなかで共に祈りを捧げます。ローズさんの手配で日本のコイも

泳いでいます。

子どもの自立に向けたカリキュラム

次に農園と動物飼育です。動物は子どもたちの心を穏やかにしてくれます。と同時に、乳牛がミルクを供給してくれますし、ニワトリが200羽ぐらいいまして、卵を子どもたちに供給してくれます。ウサギやヤギなどの小動物を、子どもたちは非常に喜んで世話をしてくれます。農園も非常に壮大です。900本のバナナが植えられていますが、もうすぐ待望のバナナができる予定です（写真4）。バラはインドでは非常に人気のある花ですが、自分たちで手作業で作ります。ちょっと失敗だったのは、中型の耕運機です。スタッフや子どもたちの手に負えませんでした。小型の耕運機がほしいなあ、と今痛切に感じています。

それから子どもの診療所。子どもは飛び回って、けがをしやすいので、診療所がほしいという強い要望でできました。常駐の看護師さんがついて優しく世話をしてくれます（写真5）。5床のベッドと、救急仕様のバンも備えました。100メートルのランニングトラック、私は走るのもスポーツは全然ダメなのですが、先ほどの話のようにあこがれの我がベターハーフは万能の選手だったそうですので、400メートルのドッヂを作るのが夢だそうです。



(写真4)



(写真5)

一度子どもたちとヨーアイドンをして、往年の名選手は負けてしまったようです。

教育は百年の計

図書館も造りました。一番大切なのは、やはり教育。教育は百年の計であり、今すぐに成果は出ないけれど、非常に大事な分野です。図書館という教育の殿堂を作り、「こういうのが勉強なんだよ」「こういうのが教育なんだよ」と伝えたかった。今、パソコン7台、図書も購入しました。子どもたちは未知の世界に誘う図書と、パソコンに夢中です。いつか日本の学校と交流したいと思います。

もともと、悲惨な子どもたちに屋根をあって、温かい食事を食べさせたい、ぬくもりのある手のひらでお世話をしたい、という気持ちで始めたのですが、それを言葉にしてみたら「憩いの村」は、こういうことをテーマにやっていたんだな、と思います。それは、子どもの自立に向けたカリキュラム▽施設の自立運営を目指した仕組み作り▽そして地域とのかかわり合い。地域の村からたくさんの子どもたちが勉強に通ってきて、その子どもたちの食事を世話をしたり、職業訓練生を受け入れたり、働き場としての仕事を提供できるような、地



(写真6)

域とのかかわりを作りたいと思います。もちろん病気や障害をもった子どもたちへの配慮、ハウスマザー、教育指導員、専属ナースなどを配置することで温かい雰囲気を作つてあげたいと思っています。

今の教室は2部屋ぐらいで、行政の手も入っていないので、教材、教具、机やイスもない、何もないところで授業をしています（写真6）。たくさんの子が来たら、部屋がないので、廊下を使って授業をしています。子どもたちが図書館に行ったとき、どんなに目を輝かせるか、想像してみてください。机があって、椅子があって、そこに腰をかけて、地球儀があって、たくさんの本が並んでいて……。そんな夢のような教室がたくさんあつたらいいなとずつと考えていたら、かなうことになりました。今まで奇跡のようなことがたくさんありました。困って困ってどうしようかと悩んでいたときに夫が助けてくれたり、たくさんの方から支援していただき、奇跡が生まれ、今年から認可学校の建設が始まります。今日の講演があると聞いて、インドから大急ぎで図面を送つてくれました。

一番望んでいるのはもちろん教室ですが、水洗トイレをつくりあげたいと思っています。インドの都会では58%ぐらいでトイレができる

ているそうですが、地方では22%です。私たちが支援している地域ではトイレがないのが普通です。朝になるとアルミの小さなつぼに水を入れ、野原に出て用を足すのが習慣です。私は特に女子のために、衛生教育の一環として水洗トイレを導入したいと思います。この水洗トイレをなかなか理解してもらえたのですが、今日の賞金で私は子どもたち、女性たちに衛生の教育だけでなく、命を預かる女性が、「清潔な、そして整ったところでお産などをさせてあげられたらいいな」と思います。380万円かかりますので、賞金をこの一部に、さらにご協力を願いしたいと思います。地域の啓発活動にもなると思うのです。地域の方々が「これがトイレなのか」と見て、「こんなトイレをうちにも作りたい」と広まっていけばいいと思います。

また、インドにはさんざんと照り輝く太陽があるので、太陽光を使った自家発電をしたい。そうすれば、子どもたちが暗い中で勉強したり、あるいは水洗トイレも水が流れなくなる（ポンプでくみ上げますのでどうしても電気が必要）ような心配がなくなります。そんなことができるのか、と夫はいうのですが、蓄電技術が向上したらきっとできるのではないかでしょうか。

地域から長く愛される地盤を目指して

「世界の恵まれない地域に小学校を作る会」の方から600万円援助いただきました。「3年間200万円ずつ寄付します。図書館だけでなく学校を作つたらどうだ」と言われ、支援いただけたことになったので、有頂天になった私は考えました。インドの学校制度は小学校が5年、中学校が3年制です。8教室あります。計画にはフューチャー（未来）があります。やがて2階建てにして、寄宿舎も造りたいんです。こんなすばらしい、日本人が作った学校があるんだと噂を聞いて、遠くからもやっ

てくる人のために、寄宿舎を作りたい。私の力では及ばないので、よろしくお願いします。

学校の名前には「コッタバラサ」という地域の名前を入れました。やはり地域の人に長く愛され、100年後でも語り継がれるような立派な地盤を作つて、寄宿舎も建てたころ、私は平均寿命にもいっちゃんでしょうか。理科、科学、音楽などの特別室、また立派な先生方をインド中から呼ばなくちゃいけない。学校ができるのを待ちわびてくれている団体もあります。「新潟青年海外協力隊を育てる会」の方が、日本から立派な先生を送り、日本語や科学、農園の指導をしたりするから、頑張って早く作れ、と励ましてくださっています。会長は新潟県の元知事で、今日も新潟から駆けつけてくださいました。大好きな人の2番目をさつきローズさんといいましたが、やはり会長を2番目にします（笑）。

思い統ければ夢はかなうということです。元小学校の先生なので話が長くなりました。もう一度夫にバトンタッチします。

* * *

人生80年、リタイア後こそ青春の夢を (片桐昭吾さん)

27歳の話はやはり夢が多すぎますね。これから支えていく私としては、90ぐらいまで生きないととてもじゃないがやっていかない。また絶対やらなきゃならん、と気持ちを新たにしています。人は誰でも若いころ、こうなりたい、あなりたいと、さまざまな夢を抱きます。人生50年時代は、働いて終わってしまい、夢は夢のままはかなく消えていったかもしれません。ところが人生80年になりました。人生60年まで働くと、残りの20年、毎日が日曜日、自由時間はこの20年の方が多いぐらいです。今やさらに人生100年と言ってもいい

時代です。女性は母親役を解放されてから、男性であれば定年後、かつての夢を花咲かせることが可能になりました。いい時代に生まれ合わせたものです。「60代青春時代の夢を実現し、70歳以上になつたら人のために生きること、人のために尽くす」こんな過ごし方をしようではありませんか。

最後にみなさんも童心にかえつて一緒に歌ってください。

♪世界中の子どもたちが♪（合唱）

神は次々と私たちに試練を与えてくれました。今歌を歌つた2人の孫は、母親が病気になつたため、私たちが今年から預かり、73歳にして子育てをすることになりました。頑張ります。

ご清聴ありがとうございました。